

炊事空間と生活財に着目した暮らしと住まいに関する研究 — 奄美大島と宮古島を事例とする比較研究 —

建設工学専攻

ME11084 ふかざわ ひかる 深澤ひかる

住環境計画研究

指導教員 清水郁郎

1.はじめに

1.1研究背景

現在の住宅の多くは大量生産が可能な、画一的な箱である。そして人々は、自分たちの暮らしに当てはまった間取りでなくても、暮らし方を工夫することで無意識に問題を処理している。

筆者は居住者も気がつかない住宅の問題を発見し、居住者に合う住まいをつくることが求められると考える。そのため、人々の暮らしぶりの多様性を把握し、暮らしぶりと言まいの関係性を明らかにする必要があると考える。

1.2研究目的・方法

本研究は人々の暮らしぶりの多様性を把握し、暮らしぶりと言まいの関係を提示することを目的とする。暮らしぶりとは、住まい手を取り巻く環境や文化と密接な関わりがあると考えられるため、独自の文化が色濃く継承されている南西諸島の2地域（鹿児島県大島郡龍郷町A集落と沖縄県宮古島市平良地区K集落）を対象とした調査をおこなった。それらを比較することで、それぞれの暮らしぶりと言まいの関係をより明確に提示し、最終的に複数の地域の人々の暮らしぶりから、現在の住まいの普遍的な特徴を提示することを試みる。特に本研究では住まいの炊事空間に着目する。炊事空間はどの住まいにも必ず存在し、ほかのどの空間よりも居住者の暮らしぶりを表す空間だと考えられるからだ。

本研究では今和次郎の考現学にならい、炊事空間（炊事・食事に関するモノが置かれている範囲）にあるすべてのモノの使い方や使用頻度、それぞれのモノの配置の調査結果から、人々の暮らしぶりをさぐる。調査軒数はA集落で13軒、K集落で12軒である。

2.調査地の概要

A集落：奄美大島は沖縄と鹿児島の中に位置し、東シナ海と太平洋に囲まれている。龍郷町は奄美大島の北部に位置し、全面積の88%は山林や原野が占め、大自然に恵まれている。また、宅地面積が全体の2%であるが、田畑面積は9%もあり、農地にも恵まれている。実際に農業をおこなっている人は多かった。また、超高齢社会である（2010年国勢調査より）。

K集落：宮古島は沖縄県那覇市から約290km離れ、東シナ海と太平洋に囲まれている。宮古島市は面積の61%が畑であるが、宅地面積はわずか6%である。龍郷町と同様、農地に恵まれている。実際に農業人口が多かったが、漁業人口も少なくなかった。K集落は宮古島の北端に位置し、森と海に囲まれた地域である。龍郷町と同様、超高齢社会である（2010年国勢調査より）。

3.住まいの特徴

3.1.住まいの構成

A集落：現在は一棟型の住まいがほとんどだが、かつては東側にオモテ（主屋）、西側にトーグラ（炊事家）が建つ分棟型の住まいだった。オモテは前後（南-北）に分けられ、「おもて」と呼ばれる前室は接客空間、「ねしょ」と呼ばれる後室は居住者のプライベート空間として使われていた。

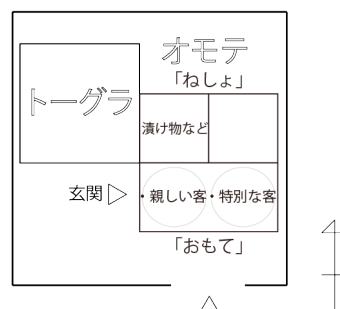


図1 奄美大島の住まいの構成

K集落：現在は一棟型の住まいがほとんどだが、かつては奄美大島と同様に分棟型の住まいで、南東側に主屋、北西側に炊事家が建っていた。主屋は前後（南西-北東）に分けられ、前室を左右に分割し、「一番座」と呼ばれる南東側の部屋は特別な客を通し、「二番座」と呼ばれる北西側の部屋は親しい客を通す・居住者の食事空間として使われた。奄美大島では前後にのみ分ける傾向だったのに対し、宮古島では、前後・左右に分ける傾向があったのが、大きな違いである。

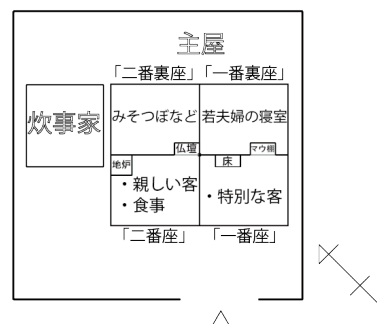


図2 宮古島の住まいの構成

3.2.炊事空間

A集落：炊事空間は門を基準としてオモテの左側かつ海のある方角（北）に設けなければならないと言われていた。また、マツガナシと呼ばれる火の神を西側で祀っていた。

K集落：炊事空間は北に設けなければならないとされ、北西に向かって煮炊きができるようにかまどを設けなければならないと言われていた。また、ヒノカンと呼ばれる火の神を北西で祀っていた。

両集落ともに、人々が祀っていた火の神は、海の彼方にあるとされるニライカナイという楽園にいる、神の分霊と考えられている。このことから海と炊事空間に関わりがあることがわかる。

4.A集落とK集落の相違点・共通点

4.1.相違点：行事用の食器の量と使用頻度

両集落において、多数の家庭で行事用の食器を確認できた。しかし、量と使用頻度に違いが見られた。A集落では数十人に対応できる量が確認できたが、そのうちの多くをビニル袋や新聞紙に包んで保管し、現在では全然使わないモノとなっていた。しかし、K集落の人々は、食器の量は5セット程度であり、年に数回使うということだった。言い換えれば、A集落では使わなくなった食器も捨てずに残しているが、K集落では必要な分しか置いていない。また調査結果よりA集落の炊事空間は周りの部屋にも炊事・食事に関するモノが置かれている事例が13軒中9軒あるのに対し、K集落では12軒中わずか2軒だった。

この違いは、それぞれの住まいの特徴から考察できる。かつての奄美大島の住まい（主屋）は、前後に分割され、プライベートとパブリックという要素に二分されていた。のちにパブリック空間（「ねしょ」）が分割されたが、両空間は明確な使い分けはされず、奄美大島の住まいはプライベートとパブリックの区別が強い。対して宮古島の住まいは、前後・左右に分割され、主屋が細分される傾向にあった。建具だけでなく、仏壇や床、マウ棚（マウは家庭の守り神と考えられている）などが各部屋の境に配置されたため、それぞれ機能の異なる部屋という意識が強いと考えられる。そのため、A集落では炊事空間を拡張させることで、多くのモノを収容する傾向があるが、K集落では各空間が独立しているため、壁に囲まれたひとつの部屋にモノを収めるという意識が強く、必要なモノの収容を最優先させていると考えられる。

以上のような違いはあるものの、行事のときに使う専用の食器や道具を常備・保管しているということは、両集落の人々にとって行事が特別なものであるということを物語っている。しかし、かつてより集う人の数が減少していることは、使用頻度の高い行事用の食器の数からあきらかである。

4.2.共通点：炊事・食事に関わらないもの

両集落ともに炊事空間には炊事・食事に関連しないモノが置かれていた。掃除道具や、畑へ行くときに持って行くモノ、思い出のモノ、飾り物、衣服やバスタオルなどである。しかしこれらのモノは、脈絡なく置かれているわけではない。勝手口から畑へ行くことが多いため、畑で使うモノを置いていたり、炊事空間と隣接する空間にあるモノと同じモノが置かれている。また、特に居住者の普段いる部屋（くつろぐ空間）と炊事空間が隣接している家庭では、両者が明確に使い分けされていない場合が多い。これらのことは炊事空間が、その他の空間や生活行為に影響され、炊事以外の機能が付け加えられていることを示している。

5.プライベート空間としての炊事空間

現在の炊事空間は、作業の場であると同時に物置

として機能している。かつては、行事のたびに近所の人や親戚が炊事空間で作業をしていた。しかし、かつてより行事用の食器が減少していることがわかった。このことから、現在は大勢の人が集まることがなくなったために、多くの食事を作る必要がなくなったのだとわかる。そして、作業空間が縮小することで、余剰空間が出現した。人々はその空間にモノを溜め込むようになり、炊事空間に対する意識は、炊事をする空間であると同時に、モノを収容する空間ととらえるようになったと考えられる。そして、様々なモノを保管することで、パブリック要素も含んでいた炊事空間は、居住者のプライベート空間へと変わった。現在は、炊事・食事に関するモノだけでなく、掃除道具や畑へ行くときに持って行くかばんや水筒、衣類、思い出のモノまで保管する空間となっているからだ。

ただし、プライベート空間でもある現在の炊事空間は排他的な空間ではない。周りの空間やその他の生活行為に影響され、様々な機能が付加されている。居住者が普段過ごす部屋の延長の空間として使われていたり、客の視線を考慮した飾り物や収納方法をとっている。さらには、炊事以外の家事で使う道具が置かれている。

炊事空間は、周りの空間の機能を取り込むことで、様々な行動が生起する空間となっているのである。

かつての炊事空間は、屋内だけにとどまらず、屋外にも作業場があり、集落の人々と協同で作業することもあった。そして、行事のときには大勢で作業し、外に開いた、社会的な意味を持つ空間だった。しかし、現在の炊事空間は住まいの中の様々な空間の機能や、居住者の生活行為に影響されやすく、外（社会、他人）に対して閉じた空間となっている。

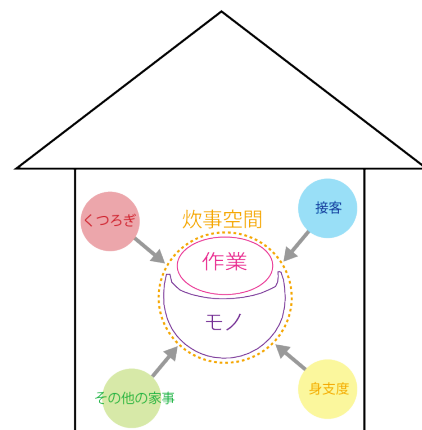


図3 現在の炊事空間のモデル

参考文献

- ・日本文化人類学会『文化人類学事典』丸善、2009
- ・今和次郎『考現学入門』筑摩書房、1987
- ・山口昌伴『台所空間学』建築知識、1987
- ・デイヴィッド・カンター『場所の心理学』彰国社、1982
- ・商品科学研究所+CID『生活財生態学—現代家庭のモノとひと—』リプロポート、1980
- ・澤一良『一番わかりやすい整理入門』ハウジングエージェンシー出版局、2008